

私の好きな場所

My favorite Place



若き薩摩の群像

鹿児島島の陸の玄関口、鹿児島中央駅東口前の中心に大きくそびえ立ち、観光客を

に達していなかったため、スコットランドの学校に通いました。驚きの若さで父母の下を離れ、生きて帰れるかも分からない遠い国へ旅立つ不安より、見知らぬ世界で自らを研鑽けんさんしたいという希望の方がはるかに大き

際交流になるとともに、母国を離れることで、母国のよさをあらためて再認識できると思います。
また、英国の技術などを学びに行った当時とは逆に、今は鹿児島を世界にもっとP

英会話講師

アレキサンダー・ブラッドショーさん

1979年イギリス・ヨークシャー州シェフィールド生まれ。システムエンジニアとしてIT企業で勤務後、2005年にALT(外国語指導助手)として来日。現在は「ブラッドショーイングリッシュスクール」を経営しながら、鹿児島国際大学で非常勤講師を務める。また、テレビ翻訳や英語のナレーション業でも活躍中。その一方、鹿児島に古くから伝わる剣術しげんりゅう「示現流」の担い手として、古武道の式典などで演武を披露することも多い。



薩摩スチューデントの精神を胸に

出迎えてくれる薩摩藩英国留学生（薩摩スチューデント）をモチーフにした銅像。幕末から明治維新を経て、近代日本を創設する原動力となった彼らに、敬意と共感を覚えます。

私が幼い頃、母の日本人の友人が、アフタヌーンティーを体験させるために、毎年日本人留学生を私の自宅に連れてきていました。その留学生から日本の絵本やお箸、紙風船などをもらったのがきっかけで、日本のものや文化に興味を持ちました。

25歳で来日し、A.L.T（外国語指導助手）として最初の勤務地となったのが鹿児島市。初めて鹿児島中央駅を訪れ、「若き薩摩の群像」を見たとき、その壮大さに驚きましたね。もともと日本の歴史は好きでしたが、当時、幕末の歴史についてほとんど知らなかった私は、「これは何の像だろう」とすぐに調べました。

生麦事件に端を発した文久3（1863）年の薩英戦争で、西欧文明の偉大さに強烈な衝撃を受けた薩摩藩は元治2（1865）年、幕府の鎖国令を破り、15人の留学生と4人の使節団を英国に派遣。彼らは帰国後、外交、文教、産業などの分野で活躍し、近代日本の歴史を大きく転換させました。

その中でも興味をひいたのが、「ナガサワワイン」の創始者である長沢鼎氏。他の留学生はロンドン大学に通いましたが、当時まだ13歳だった彼は、同大学へ入学できる年齢

だったそうで、首席で卒業したと聞きまし。長沢氏をはじめ、彼らは留学中、計り知れない努力をし、強い信念を持って頑張ったのだらうと思います。

彼らの英国留学と、私が日本へ来た目的は全く異なりますが、母国を離れて生活する大変さは同じ。海外に住むと思つたとおりにいかないことがたくさんあります。例えば、言葉の言い回しで微妙なニュアンスがうまく伝わらないこと。もちろん失敗が勉強にもなりますが、人一倍失敗することが嫌いな私は、悔しくてたまらなくなります。そんなとき、この銅像を見て、彼らも当時、同じような経験をしたのであろうと想像し、心を落ち着かせることができました。彼らが頑張れたのであれば、私にもきつと頑張れるはずだ」と勇気と活力をもらうことができますね。

英国と日本の交流を深めたい

今年には薩英戦争からちょうど150周年。薩摩と英国との関係は、スタートが悪かったものの、留学生の派遣を提案した講和交渉後、急速に交流を深めました。しかし、現在はあまり交流がないので、この節目の年を機に、鹿児島とイギリスとの人々の交流などもっとつながりを深めることができたいと思います。鹿児島のが英語を学び、留学も経験してほしいですね。国

Rしていくことが大切だと思います。鹿児島のすばらしさを実感した私も、実際に鹿児島を世界にPRする活動団体「TEDx Sakurajima」の運営チームとして、鹿児島を世界に発信中です。

薩摩の精神

来日直後に始めた薩摩の古武道「示現流」も今年で入門9年目。生麦事件で薩摩藩士が英国人を最初に切りつけた剣はこの示現流に近い流派とも言われています。

示現流の精神に「二の太刀を疑わず、二の太刀は負け」という言葉があります。これは、「何事もやるときはきちんとやらなければならぬ」というもの。薩摩スチューデントの精神の強さにそれも深く関係しているのではないかと感じています。

今後もその精神を胸に、歴史と人情あふれる鹿児島で頑張っていきたいと思っています。



示現流で「キューッ!」と声を上げるブラッドショーさん